

思考型英会話を可能にする動詞の生産性

——言語学から第二言語習得への応用——

カレイラ松崎 順子・大月 敦子

はじめに

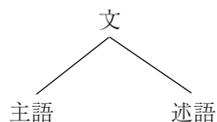
国際社会での実務能力として実用英語力が強く求められる今日、学生の英語苦手意識は根強い。それにもかかわらず学生は、英会話に対しての興味だけは失わずにいる。それは、彼らが外国語で話すことに楽しさや憧れを持っているからであろう。そして社会が実用英語力として英会話力を求めていることも、彼らは十分理解しているからであろう。この捻じれともいうべき状況を招いているのは、暗記に過度に依存したこれまでの学習方法に原因があるのではないだろうか。ゆえに、著者らは動詞の生産性に注目し、暗記に依存した学習法ではなく考えながら文を作り出す『思考型英会話』練習法を確立するための予備調査として、大学生を対象にした英語意識調査と英文スピーチの発話語の分析を行うことにした。

1. 理論的背景

1.1. 動詞の生産性：統語論からの議論

統語論が対象とする単位は文であり、主語と述語から成る (①を参照)。そして述語は述語動詞と目的語、述語動詞と補語から構成される (②を参照)。

①



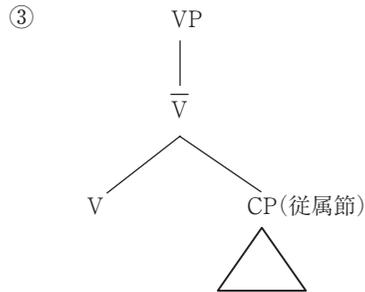
②



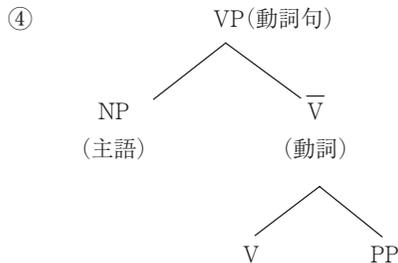
文は最低2語文から成るが、どのような目的語、補語、および副詞をとるかによって、さらに、複文・重文の形を取れば、文内の語数は大きく増えていく (③を参照)。鈴木 (1990, p. 55) は、「述語の中心となる述語動詞は、述語の構造を決定するだけでなく、主語の決定にも重要な役割を果たす。述語の中には動詞の他に目的語 (object) や補語 (complement) やさまざまな修飾要素が含まれることがあるが、目的語や補語が含まれるかどうかは動詞によって決定されるし、また、どのような副詞的修飾語句を伴うかも動詞によって決定される」

思考型英会話を可能にする動詞の生産性

と述べている。



動詞はこれらの構造の中心となって語の配列に重要な役割を果たす。たとえば、文の主語は、動詞が表わす行為によって限定され（動詞句内主語仮説：VP Internal Subject Hypothesis）、本来は動詞句（VP）の指定部に位置しており（④を参照）、VPの中にあると考えることができる（中島, 2011）。



1.2. 動詞の生産性：意味論からの議論

比喩表現の一つメトニミー（Metonymy：換喩）¹⁾を介した語の生成メカニズム解明の中で大月（2001, 2002, 2010）は、生成語彙の分析を用いて、メトニミーを介した語の意味の生成に動詞が大きな役割を果たしていることを明らかにし、動詞が統語だけでなく意味レベルにおいても、その生産性を句や文の生成に大きな役割を果たしていると述べている。

メトニミーは、ある物を言い表す時に、その物の属性や、それに関連する物で言い換えることによって、(1) a. の例文のような効果的で説得力のある表現を作り上げている。たとえば、「貨物列車の音」を(1) b. のように直接的に The sound of the freight. と述べる代わりに、(1) a. のように The freight と述べて貨物列車の音を聞き手に間接的に伝える。この間接的な伝達手法のメリットは、ターゲットの意味を聞き手の想像に委ねているところにある。しかし、ターゲットの意味が間違っ聞き手に伝わることはなく、逆に話し手と聞き手の暗黙の了解によってより説得力を持ち、想像の世界と相まって修辞効果を上げている。

- (1) a. “The freight woke up the other guys.” (“Stand by Me”: 1986. Columbia Pictures)
 b. The sound of the freight woke up the other guys.

また、メトニミーはメタファー（類似性の比喩）と並んで生産性が高く、自然言語の語の意味拡張・意味変化・多義の説明にも大いに貢献している。たとえば、dish について考えてみると、(2)a. は“食器の皿”，(2)b. は“食器に盛られている料理”とそれぞれ名詞として、(2)c. は“料理を盛る”の動詞として使われている。本来の「皿」という名詞の意味が、その近接する「料理」、機能としての「盛る」の意味を持つ。言葉遊びのようではあるが、それによって語生成の生産性を上げている。

- (2) a. Could you wash up the dishes?
 b. Please enjoy the dishes.
 c. Shall I dish out potatoes?

次にメトニミーがどのように生成されるのか、そのメカニズムについて考察する。たとえば、(3)a. “Mary began a book.” の解釈は、began と a book の間の意味的整合性を満たすためには、例文 (1) (2) と比べると推論と文脈がより要求されなければならない。なぜなら begin は、read（読む）や write（書く）のように動作を表すものを目的語とするのが一般的であるためである。しかし、実際には、a book を目的語とした (3)b. の Mary began to read a book. の解釈は容易に得られてしまう。生成語彙では、本来ならば begin と book の間で語のタイプ・エラー（Type Error）、すなわち本来それぞれの語句が意味的に共起するはずのない組み合わせが生じるのだが、これを解消するための操作として語のタイプ強要（Type Coercion）が行われていると考える（Pustejovsky, 1991, 1995）²⁾。(4) が示すように、begin は本来 EVENT を目的語（ARG2=e₂）として取るところであるが、book を目的語としている。この語のタイプ不整合によって意味が曖昧となるはずのところ、book の TELIC（目的役割）に read (e,w,x,y) があり、これを引数としてタイプ強要のオペレーションが行われ、曖昧性が解消される。本来は意味的に不整合であるはずの文までも瞬時に解釈可能になる。これらのことから、メトニミーが比喩としての修辞機能にとどまらず、語の意味の多義、語の生成において機能していることが推測できる。そしてこのメトニミーが語の議論から、句・文レベルに至り、さらに、これらメトニミーを介した意味の生成に動詞が重要な役割を持つことが図5からわかる。大月（2010）は、映画の英語台詞コーパスから集めたメトニミー表現を、それぞれ生成語彙の枠組みで分析を行い、その結果、図5が示すように動詞が句や文を作り出す生産性を持っていることを明らかにしている。

- (3) a. “Mary began a book.” (Pustejovsky, 1995, p. 204)
 b. Mary began to read a book.

$$\begin{array}{l}
 (4) \text{ begin} \qquad \qquad \qquad \text{book} \\
 \left(\begin{array}{l}
 \text{EVENTSTR} = \left(\begin{array}{l} E_1 = e_1: \text{ process} \\ E_2 = e_2: \text{ event} \\ \text{RESTR} = < 0_\infty \end{array} \right) \\
 \\
 \text{ARGSTR} = \left(\begin{array}{l} \text{ARG1} = x: \text{ human} \\ \text{ARG2} = e_2 \end{array} \right) \\
 \\
 \text{QUALIA} = \left(\begin{array}{l} \text{FORMAL} = P(e_2, x) \\ \text{AGENTIVE} = \text{begin act}(e_1, x, e_2) \end{array} \right)
 \end{array} \right) \left(\begin{array}{l}
 \text{ARGSTR} = \left(\begin{array}{l} \text{ARG1} = x: \text{ info} \\ \text{ARG2} = y: \text{ physobj} \end{array} \right) \\
 \\
 \text{QUALIA} = \left(\begin{array}{l} \text{FORMAL} = \text{hold}(y, x) \\ \text{TELIC} = \text{read}(e, w, x, y) \\ \text{AGENT} = \text{write}(e', v, x, y) \end{array} \right)
 \end{array} \right)
 \end{array}$$

(Pustejovsky, 1995, pp.203-204)

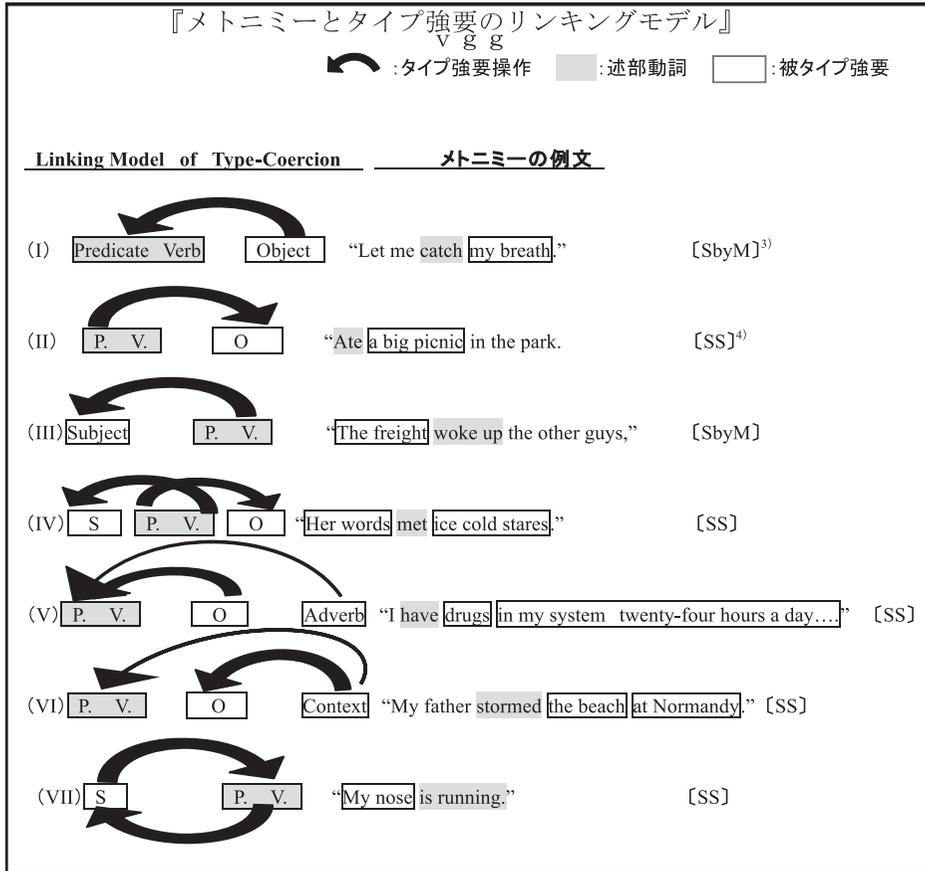
図5の(I)～(VII)が示すメトニミーとタイプ強要のリンキングモデルの分析は、メトニミー(換喩)の概念がそれぞれの述部動詞(Predicate Verb: P.V.)を中心に文内の語句との関係においてタイプ強要が行われ、タイプ・エラーを起こしていたものが、共起可能となってメトニミー表現が可能になることを示している。その際、述語動詞が中心となって他の語句との間に、矢印で示されるタイプ強要が行われ、本来は共起できないはずの語句の組み合わせを可能にし、それによって言語効果を生み出し、換喩表現を作り出している。大月(2010)は、Pustejovsky(1995)の生成語彙論(Generative Lexicon)を用いて、「容器を中身」「製作者と作品」「部分と全体」「物とその使用者」「場所と出来事」に分類されるメトニミー概念⁵⁾を具体的な例文分析することによって、動詞が中心となって、メトニミーを介した語の意味の生成において統語の結束性を他の語句に付与し、さらに文の生成にも重要な役割を果たしていることを明らかにしている。

2. 調査の目的

著者らは上述した統語論と意味論の双方から裏付けられるこれらの動詞の生産性に着目し、動詞をキューワード(cue word)⁶⁾として用いることで「思考型英会話」練習法が可能になると考える。ゆえに、その準備段階として理論的に裏付けられた動詞の生産性が、英語の

図 5 『メトニミーとタイプ強要のリンキングモデル』

(大月, 2010, p. 78)



第二言語習得の運用力養成においても機能するかどうか、さらに、英語の授業で動詞をキーワードとして用いる妥当性があるかどうかを調べることにした。

英語を第二言語として習得し運用しようとする時にも、上述した先行研究が示したように動詞の文生成の生産性を実際に機能させているのだろうか。また、その生産性は動詞・形容詞・名詞の品詞間において違いはあるのだろうか。そしてこの動詞の生産性を応用した「思考型英会話」練習法の開発が理論的に妥当であるといえるのであろうか。本研究の目的は、これらの疑問に答えることであり、すなわち、動詞の統語・意味における理論的優位性が第二言語習得段階の言語運用の際に反映されるのかどうかを明らかにし、英語の授業で動詞をキーワードとして選択することの妥当性を探っていくことである。

3. 調査方法

3.1. 調査対象

調査協力者は、関東地域の私立大学に属する商学・経済専攻の1・2年生97名（調査有効人数73名）である。彼らの英語力は英検3級または準2級程度であり、多くの学生は英語を苦手としている。

3.2. 手続き

調査は2013年7月上旬から下旬に行った。最初に英語が苦手な理由について問う質問紙調査を行い、ついで1分間スピーチを行った。スピーチは、“Which country do you want to visit?”の質問に対して、英語で自由に話すというものである。

(1) 質問紙

英語が苦手な理由を問う質問項目（苦手な理由は何ですか）において、5つの選択肢（1. 単熟語を覚えること、2. 文の仕組みの理解、3. 発音が難しい、4. 読み取り、5. その他）から選択させた。なお、複数回答を認めた。

(2) 1分間スピーチの方法と分析方法

1. 1分間スピーチは個別に行われ、“Which country do you want to visit?”の質問に対して、英語で1分間自由に話してもらい、それらを録音した。
2. スピーチをする際に、動詞・形容詞・名詞それぞれ5語を提示したが、必ず使用する必要はなく、参考とするようにした。
3. 質問文“Which country do you want to visit?”の文脈において、動詞・形容詞・名詞の品詞において日常よく使用される基本語を選び、以下の合計15語を提示した。
動詞：like, see, play, eat study
形容詞：happy, fun, beautiful, exciting, cool
名詞：people, building, hiking, cars, music
4. 録音した英文を書き起こし、各学生が1分間英文スピーチの中で使用した語の回数を数えた。

4. 結果と考察

4.1. 質問紙調査

英語が苦手な理由を問う質問事項（苦手な理由は何ですか）において、5つの選択肢（1. 単熟語を覚えること、2. 文の仕組みの理解、3. 発音が難しい、4. 読み取り、5. その他）から選択させた結果、「2. 文の仕組みの理解」と回答した学生が最も多かった。（表1を参照）。

表1. 英語が苦手な理由

	1. 単熟語を覚えること	2. 文の仕組みの理解	3. 発音が難しい	4. 読み取り	5. その他
人数	24	51	27	21	6

4.2. 品詞毎の使用回数

表2、表3、および表4は、提示した各語の使用回数と動詞・形容詞・名詞の品詞別の平均使用回数を示す。

表2. 動詞の使用回数

Like	See	Play	Eat	Study	平均使用回数
19	14	17	12	16	15.6

表3. 形容詞の使用回数

Happy	Fun	Beautiful	Exciting	Cool	平均使用回数
27	0	12	11	3	10.6

表4. 名詞の使用回数

People	Building	Hiking	Car	Music	平均使用回数
2	2	2	0	2	1.6

上記の結果より、個別のばらつきはあるものの、品詞別の平均使用回数は、動詞が15.6回と最も多く使用され、次に形容詞が10.6回、名詞は僅かに1.6回だけであまり使用されなかった。名詞の使用回数が極端に少ない理由は、提示した単語そのものの選び方に問題があった可能性も考えられるが、5語の中には、hikingのようなイベント性のある名詞、musicのような抽象名詞、building/carのような普通名詞、peopleのような集合名詞が含まれ、名詞の質として片寄りがないように提示している。この条件において、イベント性のある名詞、抽象名詞、普通名詞、抽象名詞の使用回数にばらつきはなく、5つの名詞全てにおいて使用

思考型英会話を可能にする動詞の生産性

回数が少ない。これらのことから名詞は、話者の文脈によって恣意的に選択され、提示された5つの名詞に束縛されることなく自由に選ばれたのではないかと考えられ、このことは以下で議論される文生成の生産性を左右する統語的結束性の度合いを判断する材料になると考えられる。

4.3. 文を生成する動詞の生産性

1分間英文スピーチの中で学生は、ただ思い浮かぶ単語を羅列しているだけののだろうか。もし頭の中で文という構造を意識しながら英文を組み立てる作業をしているとしたら、学生はどの程度それを行っているのだろうか。そこで英文を組み立てている時に、各品詞を使っているか、文を生成しているのか、各品詞の生産性の観点から検討してみることにした。表5は、提示した15語の品詞別に観察される、完成させた文の数（完成文）、文として完成していない未完成文（未完成文）の数を示す。提示語を使用した完成文の数は、動詞を選んだものが最も多く、形容詞、名詞の順で完成文の数は少ない。一方、未完成文についてみると、動詞を用いたもので未完成文を作成した例はほとんどなく、形容詞・名詞は未完成文の数は完成文の数を上回る。文は最低、主語と動詞から成り、動詞が文の成立に大きく寄与することは文の構造からいって自明とも言えるが、目的語・補語が必要な場合もそれらを省略することはほとんどなかった。これらのことから動詞を中心とした主語・目的語・補語の結束性は英語の第二言語習得の言語運用時においても高いといえるであろう。

表6は提示語と非提示語間に見る完成文と未完成文の数とその割合であるが、表6からも明らかなように提示語を利用した時の方が、完成文を生成する数と割合が共に高かった。

表7は有効全調査対象のうち、完成文のみを話した人数と完成文を話せなかった人数とその割合（%）であるが、調査有効対象の3割以上の学生は、英語を文章として組み立てて話すことができないことがわかる。また、文章として組み立てたとしても、1分間に1～3つの文で、しかも1つの文に用いる単語数は極めて少ない。また、ほとんどの学生が単文で話し、複文にしたり、従属節を用いて話す学生の数も極めて少なかった。

最後に本研究の目的である「動詞の統語・意味における理論的優位性が第二言語習得段階の言語運用の際に反映されるのかどうかを明らかにし、英語の授業で動詞をキーワードとして選択することの妥当性を探っていく」について検討していく。質問紙調査において英語がうまく話せない理由として、「文が組み立てられない」を選んだ学生が最も多く3割以上にのぼり、それを裏付けるように、英文スピーチの中で文章を組み立てて話すことができた学生の数と、文として成立している文の数は少なかった。しかし、文の数としては少ないが、その中で使用された提示語は、動詞が最も使用頻度が高かった。さらに、1分間スピーチにおいて、提示語と非提示語による完成文と未完成文の数において両者の比率に差異が観察されたが、特に動詞の提示語を使用した学生は全員が完成文を話していたことから、語、特に

表5. 品詞別にみる完成文と未完成文の数（提示語を使用して）

単位：文の数

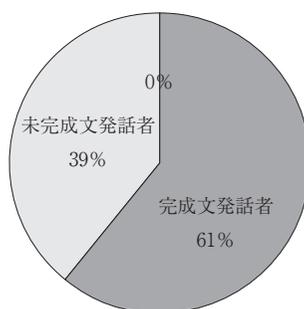
動 詞		形 容 詞		名 詞		合 計	
完成文	未完成文	完成文	未完成文	完成文	未完成文	完成文	未完成文
54	0	6	9	2	3	62	12

表6. 提示語と非提示語間にみる、完成文と未完成文の数と割合

単位：文の数と割合（%）

提示語		非提示語	
完成文	未完成文	完成文	未完成文
62	12	31	15
84%	16%	68%	32%

表7. 完成文・未完成文発話人数の比



■ 完成文発話者 □ 未完成文発話者

動詞を提示することによって発話が促進されることが確認されたといえるであろう。

以上のことから、第二言語習得においても動詞・形容詞・名詞の三品詞の中で動詞が最も文生成のための生産性が強いことが証明され、統語・意味における理論的優位性が第二言語習得段階の言語運用の際にも反映されていることが明らかになった。ゆえに、英語の授業で動詞をキーワードとして利用する「思考型英会話」練習法を行う妥当性は示されたといえるであろう。

5. おわりに

本研究では動詞の生産性を利用した『思考型英会話』練習法の可能性を探るために、予備調査として大学生を対象に英語意識調査と記録した英文スピーチの発話語の分析を行った。

思考型英会話を可能にする動詞の生産性

分析の結果、動詞の生産性は統語論・意味論だけではなく、第二言語習得の運用レベルにおいても、形容詞・名詞よりも勝っていることを確認することができた。今後は動詞の生産性をキューとして用いた「思考型英会話」の練習法を授業実践として行い、その効果を検討していく予定である。

謝 辞

本稿は H24 ～ H26 年度科学研究費助成金基盤研究 (C) 課題番号 25370655 による研究成果の一部である。

注

- 1) メトニミー (Metonymy) は日本語で「換喩」といい、メタファー (Metaphor) と並んで代表的な比喩表現の一つである。メタファーは、例えるものとの類似性を他のものに置き換え概念化するのに対して、メトニミーは、近接性を他のものに置き換え概念化する。これまで修辞表現として議論されてきたこれらの比喩が、今日では、語の多義、語・句・文の生成、さらに参照機能に関わる人の認知能力の議論へと発展してきている。
- 2) タイプ強要 (Type Coercion) : 特にメトニミーにみられる、語と語のタイプ・エラーを解消するための操作で、Pustejovsky (1991.1995) によって提案されている。
- 3) SbyM: 映画 “Stand by Me”
- 4) SS: 映画 “The Sixth Sense”
- 5) Lakoff (1987) は、認知言語学の立場から、メトニミーの例えるものと例えられるもの関係を分類し概念化している。
- 6) キュー (cue) とは本来、演劇や音楽において、次のきっかけとなる発語・照明・擬音などの合図のことを言う。

引用文献

- 大月敦子. (2001). Metonymy: Dynamism of Word Generation and Representation of the Complex System. *KLS 21*. Kansai Linguistic Society.
- 大月敦子. (2002). 「メトニミー: 動的な語の意味を如何に形式化するか～ “シドニーは大成功だった”」. *KLS 22*. Kansai Linguistic Society.
- 大月敦子. (2010). 「メトニミーの言語処理プロセスについての分析」. 『信州大学人文社会科学研究所研究』(信州大学) 4. 72-84.
- 大月敦子. (2013). 「思考型英会話練習法の試み - 言語学研究から英語教育への応用 -」. 『相模女子大学紀要 (人文系)』(相模女子大学) VOL.76A. 57-62.
- 鈴木英一. (1990). 『統語論』 開拓社.
- 中島平三. (2011). 『ファンダメンタル英語学』 改訂版. *Fundamentals of English Linguistics*. (株) ひつじ書房.
- Pustejovsky, J. (1991). The Generative Lexicon. *Computational Linguistics vol. 17*:409-441.
- Pustejovsky, J. (1995). *The Generative Lexicon*. Cambridge, MA: MIT Press.

Pustejovsky, J. (1996). The Problem of Lexical Ambiguity, *Lexical Semantics*. Oxford University Press: 1-14.